一文化の薫る活力ある地域づくりをめざして一財団では、このような事業を行っています。

「檜の皮で染める板締め絞り」

普及啓発事業

- 1. 財団ニュース「作州路」17号の発行
- 2. [共催事業]

普及講座の開催

「檜の皮で染める板締め絞り」

講 師/YUKA UJI(染色工芸家)

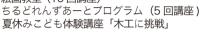
期 日/平成26年3月2日(日)

会 場/勝央美術文学館 参加者/12名

(その他)

陶芸入門講座(8回講座) 陶芸応用講座(8回講座)

絵画教室(10回講座)





芸術文化活動事業

「ミマサカコドモ絵画展」 会場風景

【主催事業】

- ○公募展「第 10 回ミマサカコドモ絵画展」
- 会期/平成26年1月7日~平成26年2月2日
- 会 場/勝央美術文学館・展示室・町民ギャラリー1・2



「YUKA UJI・平井はな・宮尾早央里作品展」

- 会 期/平成26年2月14日 ~平成 26 年 3 月 16 日
- 会 場/勝央美術文学館町民ギャラリー 1



「YUKA UJI・平井はな・宮尾早央里作品展

■公演の開催

○「野村萬斎狂言公演」 「狂言ワークショップ」

日 時/平成26年5月30日

会 場/勝央文化ホール





「野村萬斎狂言公演」の様子

「狂言ワークショップ」 の様子

「共催事業】

■企画展の開催

《文学》

- ○小介画 30「岡本綺堂の『玉藻の前』」 ○小企画31「震災の中の作家たち」
- ○コレクション展 Vol.30
 - 「郷土の画家シリーズ 石ばしる」
- ○コレクション展 Vol.31
- 「郷土の画家シリーズ 素描と淡彩 XI -」 ○コレクション展 Vol.32
 - 「勝央の美術と文学」
- ○「H25 年度勝央絵画教室作品展」
- ○「第10回陶芸教室の作品展」

【助成事業】

和太鼓コンサート 太鼓三国志 モンゴル国立馬頭琴交響楽団コンサート 勝央金時太鼓保存会活動 勝央町文化協会活動事業

【後援事業】

平成 25 年度かつたっ子フェスティバル 第9回しょうおう町民音楽祭

その他の事業

- 1. 文化財資料収集保存事業
- 2. 学術的研究及び図書の発刊事業等の 事業を継続しておこなっております。

財団では皆様の貴重な ご寄付をお待ちしております!

皆様のご寄付は、地域の文化事業 の実施に役立てられています。

ご寄付をいただいた皆様は、税額 の控除をうけることが出来ます。

地域の文化活動を応援します!

当財団は、地域の芸術文化振興の ための助成活動を実施しておりま す。詳しい内容は、団体 HP をご覧 ください。

木村 毅(きむら・き 1894-1979)

『旅順攻圍軍』大日本雄弁会講談社 1935 (恒文社復刊 1980)

勝田郡勝央町岡地区出身。作家、評論家、文学博士。 早稲田大学英文科卒。隆文館、春秋社の編集者 をしながら評論、翻訳家として活躍。明治文化 研究にも力を注ぐ。昭和初期の円本の立役者で 小説、実録、評論など多数の著作を残す一方、 日本フェビアン協会など社会運動にも参加。 1978 年に菊池寛賞受賞。著書多数。主著に『小 説研究十六講』『クーデンホーフ光子伝』など。





編集後記

当財団が、公益財団法人に移行して、1年 と半年ほどがたちました。今年度は、3年越 しに実現した「野村萬斎狂言公演」が実行委 員会形式で実施されました。「ミマサカコド モ絵画展」も第 10 回を無事終了。新年度か らは、また気持ちを新たにして、事業に取組 んでいこうと思います。どうぞ、応援よろし くお願いします。(E.N)

公益財団法人 美作学術文化振興財団

発行日: 2014年3月31日 編集・発行:公益別団誌人美作学術文化振興財団 印刷: 友野印刷株式会社



なジャンルで活躍しましたが、その語学力を生かしジャーナリストとしても活躍。戦争特派員として戦地に赴き、実際の兵士 の生活や現地の様子を細かに取材し、人にとって「戦争」とは何かを考える作品を残しました。代表作に名将の入木希典を一 人の父親として描いた『旅順攻圍軍』などがあります。

軍国少年の追憶

定兼 充(勝央町植月北)

かの日より 五十年経しも野菊咲く 兄征きし地の 勝間田駅 (充)

勝間田の駅は勝央町の玄関ともいうべきJR 姫新線の勝間田の駅である。

近くに西日本最大ともいわれた、陸軍日本原演習場の玄関口でもあった。

多くの軍人がこの駅より乗降し、演習場へ行き、ここから直ちに北へ南の戦場へ、征ったことであろう。

八十歳前後の男達で、この日本原の話を悲喜 こもごもと、語ってくれる者が多い。

私が先般奈良のある学校を訪問したおり、そこのある先生が、見習士官時代に日本原ですごしたことを、感慨深く話された。

この勝間田の駅からも近郷近在の男たちが出 征していった。

縁起をかついでか、勝まだ 勝また かつまた またかつ また勝 勝つ 勝つ・・・というように、神にすがる思いであった。

ちなみに、隣の駅である林野駅は、はやしの はや死野 はやく死野 はやく死のう・・・ わざわざ林野駅でなく、勝間田の駅から出征し た者もいるという噂を聞いたことがある。

いずれにしてもどちらの駅からも多くの者が 歓呼の声に送られ、出征していったが、多くの 者が還らなかったのは、事実である。兄もその

表後六十年(1990年) 東国少年の遊館(1907年) 上ではより、中央の場合) 東京の日本のは、中央の場合) 東京の日本のは、日本の場合)

「戦後六十年(太平洋戦争)2005 軍国少年の追憶(其の一) (孫へ伝えたい 平和の尊さ)」 /定兼 充著



z. 「アカシアの花」1983 /定兼 孝 遺稿

うちの一人であった。

自宅から見送られて駅についた入営・入隊者は、ここでいよいよ多くの人々との別離である。

駅前広場・ホームなどには、あちらこちらに 人垣の輪ができる。この輪は友達・先輩・後輩・ 勤務関係者・各代表者などが多く、家族は輪の 外で、ただ、おろおろするばかり。

声をかける者、軍歌を唄う者、小旗をふる者、 ばんざいを叫ぶ者などで、じっくりと別れを惜 しむいとまなどない状態である。

列車がやってきて乗車し発車すると、小旗を 打ち振り、口々に、ばんざーい ばんざーい ばんざーいで、ホームに入りきれない時は、線 路内に入りの見送りである。小旗を打ち振る音 と、ばんざいの声に発車の汽笛と、列車の音が 消されてしまうぐらいである。

入営・入隊者は、列車の窓から、デッキから、 上半身を乗り出して、手を打ち振ったり、挙手 の礼をして、駅の小旗が見えなくなるまで、こ うしている。見送る人々も、列車が見えなくな るまで、小旗を打ち振っている。勝間田の場合は、 西はせんぼんの池に曲がってみえなくなるまで、 東は小矢田の鉄橋に曲がって見えなくなるまで の見送りである。列車が駅の構内を出てしまう と、群衆はホームより線路内に下りて見送りす る者も多かった。

こうして多くの者が出て征き、再びこの駅に 降り立つことのできない者も多くいた。 兄の時は、昭和15年11月のおわりなので、 まだまだ若者達もおおくいたし、国も見送りを 奨励していたので、にぎやかであった。

勝間田農林学校に勤務していた関係で、全校生徒総出の見送りであった。現職で甲種合格の二十歳の者が現役入隊は最初であったようなので、時まさに軍国時代、校長先生以下全職員、全生徒の見送りであった。

少しの間であったが、広戸小学校の教壇にたっていたので、ここの児童の皆さん、広戸の青年学校生徒の皆さんも、遠くから自転車に乗って、また、お父さんの自転車に乗せてもらって、見送りにきてくださった。

(私が広戸小学校に勤務していた時、ある老人のお方が、「兄弟とふたりのお勤めですなあ。・・・」といって、見送ってくださったことを話してくださった。有り難いことである。この御老人もいまは亡く、ご子息も、定兼先生の後につづくといって、海軍に志願し南方の海に散っていかれた。もって冥すべし。)

また、青年団長をしていたり、父が在郷軍人 会長の関係もあったりして、何百人という見送 りの人々になったようである。

構内に入りきれない人たちは、沿線で見送った。

ひとごみに押されてプラットホームより土手 のほうに落ちそうになった。しぜんに土手のほ うを見ると野菊の花が霜のなかに咲いていた。

人の一生には他人からみると、なんでもない 思い出かもしれないが、その人にとっては、い つまでも強烈な印象となって脳裏にやきついて いるものがある。

私には、出征風景と同じように野菊の薄紫の色が、五十年たっても目にやきついて忘れることができない。

勝間田駅のまわりは、半世紀以上もたつと大きくかわったが、一部改造したが駅舎と、下り線のプラットホーム、そしてその南がわの土手はかわっていない。

いまでも、何事もなかったかのように、野菊は、 可憐な花を秋にはつけてくれる。

征く人を 朝明の路で 見送りし 夕べにそこで 遺骨を迎かう

征く人も 見送る人も ただひとつ 再びあう日を 祈りてやまん





■引用・参考文献

- ・「戦後六十年 (太平洋戦争) 軍国少年の追憶 (其の一) (孫へ伝えたい 平和の尊さ)」2005 / 定兼 充著
- ・「アカシアの花」1983 / 定兼 孝 遺稿

※文章の引用にあたり、記述年数などの一部を、現在 の数字に修正いたしました。

関係者周辺略年譜

1894年 (明治27) 日清戦争。

1904年 (明治37) 日露戦争。

1914年(大正3) 7月28日より第一次世界大戦 8月23日より日独戦争。

1920年(大正9) 3月定兼孝さん生まれる。

1923年(大正12)関東大震災発生。

1930年(昭和5) 定兼充さん生まれる。

1931年(昭和6) 満州事変。

1937年 (昭和12) 7月7日より日中戦争。

1939年(昭和14)第二次世界大戦。

1940年(昭和15)定兼孝、勝間田駅より出征。

1941年(昭和16) 12月8日より太平洋戦争。

1943年 (昭和18) ブーゲンビル島へ出兵。

1945年 (昭和20) ブーゲンビル島4月14日戦死

8月15日終戦

1947年(昭和22)遺骨受渡通知書交付